科学技術は人間を解放しているのか？
――釜山現代美術館特別展「ランダム・インターナショナル：コントロール不能」「完全なテクノロジー」

会場：韓国釜山現代美術館
会期：前者 2019年8月15日－2020年1月27日　後者 2019年8月15日－2019年11月24日

王 馨怡

2017年、コンピュータ囲碁プログラムのAlphaGoが、史上最強との呼び声高い中国の柯潔九段を相手に勝利した。もう一人の著名な囲碁棋士・李世乭も、AlphaGoと対戦して5戦中1回しか勝てず、AIの台頭を理由に2019年に引退を決めた。これらのことは、人工知能が人間を超えたことを意味するのだろうか。科学技術は人間を解放するのか、それとも支配するのか。こうした疑問を抱きながら、2019年の夏に環境問題、人類、科学技術をテーマに特別展を開催していた韓国の釜山現代美術館を訪ねた。

この特別展は二回に分けて行われた。第一回は、「ランダム・インターナショナル：コントロール不能（Random International: Out of Control）」展である。ランダム・インターナショナル（Random International）とはアートグループであり、現代世界における、機械によって誘導される生命の意味を探求している。この「コントロール不能（Out of Control）」展は、「機械は人間の生活の中でどんな役割を果たしているのか」という問題を掲げて、科学技術と人間と環境の関係を再考するものだった。第二回の特別展は、「完全なテクノロジー（Complete technology）」展である。これは、近代の産業革命の後に第4次産業革命が予測される今日の技術革新と、社会における変化を検証する展示会であり、構造化された現実に洞察を与えるものだった。この二つの特別展が全体として示唆していたのは、現代の資本主義社会の中で、いかに科学技術の進歩によって、人間と自然環境の関係や、労働と難民問題に対する人間の考え方が変りつつあるかということである。それは、「科学技術は人間を解放しているのか」という問いに直結するものだった。

1「自然」のコントロール

第1次産業革命から第4次産業革命にかけて、科学技術の進歩に伴い、人間の能力はますます拡張してきている。かつての人間は自然の一部として、予測不可能な自然を尊重しながら生きていたが、現代の資本主義社会の中では、人間は自然を最大限利用し、それを支配しようとしてきた。この特別展は、「人間中心の（human centered）」の世界では、最終的に「自然はコントロールされるのか」という問いを投げかけている。この問いに対して、ハンネス・コッホ（Hannes Koch）とフロリアン・オルトクラス（Florian Ortkrass）は、「レインルーム（*Rain Room*）」（2012）という作品を通して、科学技術に媒介された人間と自然環境の関係を探求している。

図1 レインルーム（Rain Room）（2019年8月21日撮影：王）

「レインルーム（*Rain Room*）」は、水とカスタムソフトウェアと3D追跡カメラを用いて、芸術的な洞察と科学技術を組み合わせることで自然環境を強調するアートワークである。レインルームに入ると、人は雨にさらされると同時に雨から保護される。雨の音と匂いが強烈に感じられる一方で、その直接的な触感は不在である。絶え間ない雨の中で、人は自由に歩き回りながらも、乾いた状態を保つことができる。すなわち、雨が降るという自然現象を再現しつつも、人が雨に濡れない状態で雨を感じながら自由に動けるようにするという、自然と人工から成る独特な環境を作り出しているのだ。それにより、

レインルームの中では、科学技術を介して人間と自然の間にどのような相互関係が起こるのかを体験することができるのである。

2 両義的な科学技術

第4次産業革命の発展により、人間はAIやロボットのおかげで、過酷な肉体労働と単純作業の「労働（labor）」から解放され、「自己実現」に向かって生きられる可能性が示されてきた。しかし、こうした中で新たな疑問が投げかけられてきたことも事実である。現代の科学技術は、人間の解放のために革新を起こしているのか、技術開発の成果はすべての人間に等しく分配されているのか、といった問いがそれである。

科学技術と「人間の解放」に関しては、ジュリアン・プレビユー（Julien Previeux）の「私の（深い）心はどこにありますか？（*Where Is My (Deep) Mind?*）」（2019）という作品がある（https://www.previeux.net/fr/videos_WIMDM.html）。AlphaGoの開発会社の名前も「DeepMind」であるから、この作品の名前は、AlphaGoをすぐさま想起させる。ビデオに登場する4人のパフォーマーは、さまざまなジェスチャーによる人工知能の学習プロセスを表している。彼ら彼女らは、障害物の回避やボール遊び、それにボクシングなどのスポーツゲームを練習している。これは、人工知能が対話の機能に基づいて交渉プロセスを学習する時に発生するエラーに関連している。ビデオの後半で登場するデジタルアシスタントのMは、多くのハイテク企業が提供するデジタル労働の象徴である。すなわち、それは、GAFA（Google、Apple、Facebook、Amazonを表す複合語）や小規模の新興企業が、労働者の代替えシステム（ソフトウェアまたは製品）を開発するために、低賃金で働ける労働者を募集している状況を示唆しているのだ。これは、「自己解雇のための労働」という皮肉な現状を示していると言えるだろう。

図2 私の（深い）心はどこにありますか？（*Where Is My (Deep) Mind?*）
（Julien Previeuxの公式サイトより提供）

現代の資本主義における科学技術は両義的である。一方では、AIや自動化システムのおかげで、生産効率が上がり、多くの労働者は解放され、人間性を高める生き方を求めるチャンスを手に入れることができる。他方で、一部の下層労働者は、仕事を失い、生きづらい生活を送らなければいけない可能性が高くなる。「余暇をどう過ごすか」という問題も一つの重要な社会的課題になる。さらには、「人間の解放」の問題だけではなく、技術開発の成果の分配にかかわる不平等の問題もある。資本主義社会では、技術の変化によって、人間の労働の性質、形態、構造が変化する。これに関して特筆すべき作品が、ジュリアン・プレビユー（Julien Previeux）の「異常な構造（*Anomalies Construites*）」（2011）である（https://vimeo.com/59789963）。

図3 異常な構造（*Anomalies Construites*）
（Julien Previeuxの公式サイトより提供）

このビデオ作品では、人のいないオフィスで、何十台ものコンピューターが作動している。コンピューター画面の中には、SketchUpというGoogleが提供する無料の3Dモデリングソフトウェアが装備されている。またこの作品では、ボイスオーヴァーのナレーターが、Google Earthの3Dモデリングを完成する際の、ある二人の逸話を紹介する。最初は、自分たち自身の物語を語り、世界的なIT会社のおかげで自らの才能を発見し、不安感から逃れ、情熱的になってきた経緯を表明する。しかし、その後、別の声が、労働搾取の現実を暴露し、それから偽装された労働形態と偽りの満足や情熱を追及していく。さらにこの作品は、建物を3Dでモデル化して示すことで、都市建設のために土地を開発利用する方法が、近代化の歴史における資本主義的操作に他ならないことを明らかにしている。

3 難民と宇宙産業

現代科学技術の進歩によって、人間はいよいよ地球から離れて宇宙に行く。宇宙産業の隆盛は、資本主義における現代科学技術の発達を示している。同時に資本主義の産物としてもう一つ顕著になってきたのが、難民である。その背景には、資本主義の発展によって生じた二極化がある。お金持ちと貧乏人との間の分断だけではなく、先進国と後進国の間にも極端な差が生まれてきた。こうした状況の中で、後進国から先進国へ向かう難民達にとって、受け入れが一つ大きな問題となってきている。「現代の宇宙産業は進んでいるから、難民を宇宙に送ればどうだろうか」と考えるハリル・アルティンデレ（Halil Altindere）は、「宇宙難民（*Space Refugee*）」（2016）と「コフテ航空（*Kofte Airlines*）」（2016）の作品を通して、資本主義の欲望と欺瞞を鋭く表現している。宇宙産業は進歩的な研究成果である一方で、実際には政治的トラブルや経済危機、さらには国家紛争に組み込まれているのだ。

「宇宙難民（*Space Refugee*）」（2016）は、元宇宙飛行士としてのシリア難民ムハンマド・アーメド・ファリス（Muhammed Ahmed Faris）の物語で始まる。「難民を受け入れたくない場合には、火星に送ってみてはどうだろうか」という疑問について、宇宙研究者、宇宙法の専門家、建築家とのインタビューを行い、そのことが実現する可能性があると結論づけている。難民は、政治的・経済的支配を目的に戦う国々の戦争とテロによる産物である。高度な技術の時代にあって、資本主義の短所は、他にもさまざまな形で現れている。それに対して、多くの科学者や未来派のアーティストは、「過剰生産の社会となった地球はもはや回復できない」と考えながら、宇宙の植民地化を代替手段として提案し、より皮肉な状況を示唆しているのだ。

図4 コフテ航空（Kofte Airlines）（2019年8月21日撮影：王）

「コフテ航空（*Kofte Airlines*）」（2016）は、トルコにある難民キャンプで、シリア難民と共同で作成された大規模な広告写真である。この作品は、飛行機に乗る難民を示すことで、危険な旅に出ている人々の状況を皮肉っぽく表現している。「コフテ航空」という飛行機は、偽善的で民族主義的な資本主義国を象徴している。これは、1947年にインドがイギリスから独立した時の、列車移動する難民のイメージを想起させるが、宇宙難民も同時に暗示している。宇宙船に乗ることは不可能かもしれないが、この作品は、旅行のロマンスと死の危険性を混合させることで、奇妙な仮想現実を作っているのだ。

このレビューでは、韓国の釜山現代美術館の「ランダム・インターナショナル：コントロール不能（Random International: Out of Control）」展と「完全なテクノロジー（Complete technology）」展が、科学技術、人間、自然環境の関係性を問題化していることを論じた。ここでは、展覧会の作品を通して、「自然は本当にコントロールされるのか」「科学技術は人間を解放しているのか」「宇宙産業の発展によって、難民問題は解決できるのか」などの問題が提起されていることを検証したが、現代の資本主義の現実には、更に複雑な現状と難解な課題があり、今後も様々な領域で考え続けられるべきであろう。

参考文献

Boulding, Kenneth E. (1966) *The Economics of the Coming Spaceship Earth*. Baltimore: Johns Hopkins University Press.

Heise, Ursula K. (2008) *Sense of Place and Sense of Planet: The Environmental Imagination of the Globe*. Oxford: Oxford University Press.

鈴木晶子（2018）.「AI時代の技術文明と人間社会——AI技術と人間の未来」、総務省学術雑誌『情報通信政策研究』, 第2巻第1号, pp.21–43.

ランダム・インターナショナルの公式サイト https://www.random-international.com/rain-room-2012　最終アクセス2019年11月20日